

【東京】「社会の歪み」に向き合うことこそ、法医学の魅力-奥田貴久・日本大学医学部社会医学系法医学分野教授に聞く ◆Vol.2

日米の「死の現場」から浮かび上がる社会の実相

2025年12月8日（月）配信 m3.com地域版

2020年、日本大学医学部（板橋区）社会医学系法医学分野の第3代教授に就任した奥田貴久氏。形成外科医として10年間の臨床経験を積んだのち、2011年に法医学へと転じた経歴を持つ。奥田氏が最初に形成外科医を志した背景や、キャリアチェンジの契機となった世界的な法医学者トーマス野口氏との出会い、そして法医学の魅力について話を聞いた。（2025年10月6日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら



奥田貴久氏

美容医療の華やかな世界へ憧れ、形成外科医として出発

——奥田先生が医師を志したきっかけを教えてください。

私は三重県南部の田舎町で育ち、身近に知る職業の中で最も魅力的に映ったのが医師でした。父は医療関係の仕事をしており、自然と医療の世界に関心を持つようになりました。高校時代は決して勉強熱心な生徒ではありませんでしたが、医師になるという思いは変わらず、2年間の浪人生活を経て、日本医科大学へ進学しました。振り返ると、あの2年間は、人生の中でも特に努力を重ねた時期だったと思います。

——キャリアの出発点は形成外科だったと聞いています。最初に形成外科に進んだのはなぜですか。

もともと関心を持っていたのは美容外科でした。学生の頃は華やかな世界への憧れがあり、雑誌で目にする求人広告の年収の高さも魅力的に映り、「これは良い業界かもしれない」と思ったのを覚えています。一方で、臨床医としてしっかり患者さんを治療できるようになりたいという思いもありました。そこでまずは基礎的な外科的技術を身につけようと考え、日本医科大学の形成外科に入局しました。その後は大学病院と関連病院の両方で経験を積み、少しずつキャリアを重ねていきました。

医師になって5～6年目になると、形成外科医として最低限のことがこなせるようになり、一人医長なども経験して、大きな充実感を感じていました。しかし次第に、自分は形成外科にあまり向いていないのではないかと感じるようになった。

うになりました。手先が際立って器用というわけではなく、美容外科にも通じる「より美しく仕上げるための直感的なセンス」はあまりなかったのです。

後になって振り返ると、私はむしろ、感覚よりも客観的に分析しながら考えることの方が得意だったのだと思います。それでも一度選んだ道である以上、途中で投げ出すことはしたくありませんでした。少なくとも専門医を取得するまではやり遂げようと決め、その時期を過ごしていました。

トーマス野口氏と出会い、アメリカで法医学を学ぶ

—そこから、なぜ法医学に進んだのでしょうか。

分子生物学を学びたいという思いから大学院に進学しましたが、学位取得を目指し、美容医療の臨床経験と関連するテーマで研究に取り組むことになりました。当時、美容目的で顔や胸部に物質を注入した患者さんが、炎症などのトラブルを起こして外来を受診することがありました。注入物質の中には、厚生労働省の認可を受けていないものも多く存在しており、それらを分析・同定する研究をテーマとしました。その研究を進めるには、法医学教室に設置されている分析機器を使用する必要があり、自然と法医学教室に出入りするようになりました。

その中で、母校の先輩で、ロサンゼルス郡検視局の局長を長年務め法医学の世界的権威として知られるトーマス野口先生を知りました。先生の下で学べば、日本の法医学に不足している部分を学び取り、それをアメリカから持ち帰って社会に還元できるのではないかと考えたのです。もともとアメリカ留学への意欲も強く、社会にインパクトを与えられるような研究テーマを模索していた時期でした。そうした思いが重なり、形成外科から法医学へとキャリアを転じ、アメリカで新たな挑戦をしてみようと決意しました。

—トーマス野口先生から、法医学者としての心構えを学んだそうですが、特に印象に残っている教えは何ですか。

大きく二つ、印象に残っている教えがあります。一つは、「法医学は臨床や社会に広く役立たなければならない」という考え方です。法医学の中だけで問題を解決して、それで終わりにするのではなく、得られた学びを社会に生かしていくことが大切だと説かれていました。野口先生は、国民の知る権利に応えるべきだという信念の下、社会を揺るがすような死亡事件が起きた際には、積極的に記者会見を開くなど、法医学の専門的な知を社会へと開いてくれました。

もう一つは、先生ご自身の生き方に関わる教えです。野口先生は第二次世界大戦を経験され、戦後に渡米して、努力の末に法医学の世界でトップの地位に上り詰められました。「戦時中の飢えや困難を生き抜いた経験があれば、何が起きても生きていける」とおっしゃっており、そのたくましさ強く印象に残っています。そして「成功する人は、どの分野に進んでも成功する」ともおっしゃっていました。その言葉の裏には、「あなたも法医学者として自分の信じる道で頑張りなさい」という励ましの思いが込められていたように感じます。

知られざる「社会の歪み」に向き合う、法医学の現場

—法医学のどのような部分に面白さを感じてきましたか。

2013年からメリーランド大学医学部法医病理学に留学し、米国の法医制度の下で解剖や現場検証の研さんを積みました。アメリカでは、銃犯罪や薬物依存、人種差別など、社会が抱える深刻な現実を、法医解剖を通して目の当たりにしました。一方、日本でも近年は薬物関連死や、ひきこもり中年者の孤独死、老老介護の共倒れなど、社会の歪みを感じる事例が少なくありません。

法医学の魅力は、日常生活では決して見えない社会の実相を、死を通して見つめられるところにあります。そうして得た気づきを社会に伝えていくことが、自分にできる貢献の一つだと感じています。例えば著書を発刊するのも良いかもしれませんが、どのような形で発信していくか、模索しているところです。

2001年日本医科大学卒業、同大形成外科学教室に入局。2005年に大学院医学研究科に進学、2011年同大形成外科学助教・講師、トーマス野口氏と出会ったことが転機となり、法医学の道に進む。2013年メリーランド大学医学部法医病理学へ留学し、米国法医制度の下で解剖、現場検証の研さんを積む。2015年日本医科大学法医学講師、2017年同准教授を経て、2020年より現職。

【取材・文＝久保 圭】（写真は本人提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

